

Sophia-R

Sophia University Repository for Academic Resources

Title	ミサと茶の湯に見る天地人の調和：侘茶とキリスト教の本質的一致についての一考察
Author(s)	椿, 巖三
Journal	キリスト教文化研究所紀要
Issue Date	2022-03-16
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	Publisher
URL	https://digital-archives.sophia.ac.jp/repository/view/repository/20220314003
Rights	



上智大学
SOPHIA UNIVERSITY

茶道とキリスト教

ミサと茶の湯に見る天地人の調和

—— 侘茶とキリスト教の本質的一致についての一考察 ——

椿 巖三

いかに人、遍界をたな心に握るといっても、其身のあにまを
失なわば何の益ぞ

マタイ十六・二四

目次

前書き

- 一、茶の湯とキリスト教 運命の出合い
- 二、ザビエル渡来ころの日本の茶の湯
- 三、ヴァリニャーノによる茶の湯の採用
- 四、ロドリゲスが見た茶の湯
- 五、四百年を経て 今に続く「キリスト教と茶道」
- 六、天地人の調和 ミサと茶の湯

七、修道としての茶の湯
八、ラウダート・シとしての茶の湯

前書き

日本の歴史の中で、桃山時代、茶道が千利休によって大成されてゆく三十年ほどの時間と、フランシスコ・ザビエルによってもたらされたキリスト教が隆盛となるころが奇しくも重なり合う。それから四百年ほどの時間が過ぎたが、近年特にキリスト教と茶道の関係が問われ続けている。

茶の湯とキリスト教の出会いとは何なのであろうか。巡察師ヴァリニャーノは、茶の湯とキリスト教の間にどのような同一性を見て教会に茶の湯を採用したのであろうか。当時とは全く変わってしまった現代社会の中で、その両者はどのように関わり合うのであろうか。私は現代において茶の湯を行うプロテスタントのキリスト者として、茶事や茶会、稽古の中に両者の関係を考えてきたが、近年カトリック信者となり、ミサに与る中で茶の湯とミサのつながりが見え始めた。更にベネディクトの戒律に触れ、修道生活について知ったとき、ミサと茶の湯と修道院がともに現代が失っている、神、人、自然の天地人の調和の場であることに気付いたのである。

茶の湯には人の心を静め救うものがある。侘茶の根底にある自然回帰とその考え方の中で救われるといえよう。日本人は古来この自然の中にある『恩寵』と申すべきものに救われてきたし、この「恩寵」なしに茶の湯は成立しないといつてよいであろう。問題は現代人が自然界を失っていることと共に、自然との関わりを見失っていることにあるのではないかと思う。

本稿は研究発表というものではなく、これまでの経験や、その中での思い、考察によるものである。自分なりに

茶の湯の歴史を振り返りながら、現在における茶の湯の意味や、在り方について、細見を記させていただきたい。

一、茶の湯とキリスト教、運命の出合い

茶の湯とキリスト教の出会いはフランシスコ・ザビエルの日本渡来に始まる。

鹿兒島に着いたザビエルは日本国王から布教の許可を得るために都（京都）に上ろうとした。京、大阪に入るには、陸路は荒れ、様々な危険があるため、波静かな瀬戸内を船で進み、堺の港から上陸するのが筋であった。押されるように上陸した堺の町がそのころ侏茶の隆盛期にあつたというのはまことに運命的なことであつた。

更に、堺に向かう瀬戸内海航行中、知らない日本人が、ザビエルに途中頼る人がないことを知って、この人を頼れと堺の町の日比谷家に宛て紹介状を書いて渡してくれた。日比谷家は堺の富裕な商人であり茶人でもあつた。この日比谷家の了慶は十年後一家で受洗し、この家は聖堂となり、信者の集会所、宣教師の宿ともなり、教会の中心となつたのである。さらに宣教師たちは茶人了慶から茶のもてなしを受け、日本における茶の湯と宣教師の最初の出会いの場ともなつたのである。インドに向けてリスボンを出たとき日本についての知識も知る人もなかつたザビエルが、日本に向かうことになり、やがて堺での宣教の中心人物となる了慶の家を訪ねることになつたことは不思議なことである。この大航海時代、イエズス会が結成され、日本人が歴史の中で育んだ、その民族性、良識と文化の粹である茶の湯とキリスト教の福音がこうして地球の反対側で出会うことになつたのである。

二、ザビエル渡来ころの日本の茶の湯

茶道の中には「侘び」という重要な根本的概念がある。「上(外側)は粗相に、内は律儀に」、一休宗純に禅風を学んだ村田珠光(一四二三〜一五〇二)は、茶の湯の舞台を東山の書院から藁屋に移し、墨蹟をかけ、「藁屋二名馬ツナギタルガ良シ」といい、道としての茶の湯を提唱した。「京、堺に珠光の弟子多し。」(山上宗二記)。名利、栄達を願い上らんとする世の流れの中にあつて、自らの意志で、それとは別のいわば降りてゆく生き方を説く茶の湯はすでに共感を呼び、広まっていたのである。

ザビエルが堺に上陸したのは一五五〇年。武野紹鷗は四八歳の全盛期、弟子の利休二十八歳のときであつた。茶祖村田珠光の後を受けてその茶風を進めてゆく紹鷗が、弟子の千利休に一文「侘びの文」²⁾を与えたというのもこのころのことであろう。東山の義政(一四三六〜一四九〇)に始まつた書院の格式の茶の湯は、珠光(一四二三〜一五〇二)、紹鷗(一五〇二〜一五五五)により侘茶³⁾の道へと進み、利休(一五二二〜一五九二)に極まる。戦乱の世に生き方を求めた人々は、自分を低くし、自然に向かつて降りてゆく茶の湯に命の在り方を見ていたのである。冒頭のマタイ伝の言葉を携えて来日したザビエルは、日本人に福音、真のいのちというもう一つの生き方を伝えようとした。こういう面で侘茶とキリスト教はその方向において類似している。茶の湯とキリスト教とは偶然に出会つたのではなく、なぜか時を同じくして侘茶という福音的ともいえる茶の湯の在り方が広まっていた。茶の湯が求めるものとキリスト教の説くところとが出会う準備をなしていたかのようにすら見える。

三、ヴァリニャーノによる茶の湯採用

ザビエル渡来から三十年後の一五七九年、東洋地域を回る東インド管区の巡察師（最高司令官）としてヴァリニャーノが来日した。この間、ザビエルに続く宣教師たちの活躍で宣教は実っていったから、ヴァリニャーノは日本での宣教に大きな期待を持って宣教方針を定めた。ヨーロッパ人の常識では理解できない日本という特殊な国柄を理解し受け入れ、適応主義といわれる宣教地に適応した伝道方針を決めた。その方針の中でヴァリニャーノは短時間に茶の湯への理解を示し茶の湯の採用を決めた。それは当時の茶の湯の隆盛を見るとき、社交上のためにも宣教のためにも欠かせないものであったことだが、神学校等に茶室を造り、専任者を置き、細則を定め、それを実施せんとするヴァリニャーノの熱誠はそうした社交上の実利とともに、キリスト教徒にとってもその信仰、靈性を養う助けとなることを靈的に直感していたことによるのであろう。

茶の湯の隆盛の中で茶のもてなしは欠かせなかったが、もてなしができるための修行自体が、清めにおいて、所作において、もてなす心の養いにおいて、それはキリスト者としての修行ともなつた。ここに修道がもてなしと一つになる。これはヨハネ・パウロ二世の『この共同体が客に対する手厚いもてなしの場となる』⁽⁵⁾と重なる。

「茶の湯者規則」には、「風炉の水が沸くように何本かの炭をつぎ、夜明けの間に祈りを捧げなさい。」⁽⁶⁾とある。灰も炭も整え、風炉に置かれた釜に湯が沸く間、一人早朝の祈りを捧げる。これは茶室ならでは、人から自然へ、宇宙、神への、祈りと瞑想であろう。ヴァリニャーノが茶室で祈るようにとの一文を加えたとき、茶の湯とキリスト信仰は結びついた。教会内で茶の湯を行うと決めたことは、茶の湯がキリスト教に反さなければかりか、一つになれることを認めた重要な決断であつた。

ヴァリニャーノは日本とヨーロッパを結ぼうとした。茶の湯の採用、遣欧少年使節団の派遣や印刷機の搬入。三度の来日の中で果たした功績は多大であった。ヴァリニャーノによる教会の茶の湯の活動がどこまで進んだかの推定は難しいが、結びつきが進む中でやがては茶の湯の神学が生まれたことすら考えられる。しかし、これからいとうとき豊臣秀吉によつて禁教令、さらに徳川の禁教令と続き、キリスト教と茶の湯との結びつきは、その実を見る前に宣教師が日本から追放されて、教会における茶の湯は、始まつたばかりで封じられる如くになつてしまつた。しかしヴァリニャーノが祈りの中で靈の導きを得て判断し決断したことは、禁教の中で中断されることはあつても消滅することはない。神から出たものであれば、息は絶えてはいない。現代の掘り起こしと真剣な祈りの中で息吹き返すことであろう。

今に残る出会いと交流の事実、その結実

禁教により教会は根こそぎ取り壊されて跡形もなくなり、この時代両者に交流があつたということは徳川の鎖国の間に完全に忘れ去られてしまつていた。しかし過去のこの両者のかかわりを知る手がかりがいくつか残っている。

①宣教師の報告書

日本国内には、キリシタン同士の手紙、名簿類、キリシタンの活動に関する文献は皆無に等しい。激しい迫害の中で自らも燃やし、あるいは取り壊しするとき教会とともに処分されてしまつたのであろう。当時の日本を知るうえで何より決定的なものは、宣教師たちの本国や本部への報告書である。当時の日本の状況は、国外に保管された宣教師の報告書が戦後翻訳されたことにより、キリスト教と茶の湯の交流も知られることとなつたのである。宣教師たちは勤勉に詳細に報告書を本国に書き送つた。バチカンやポルトガルのアジュダ文庫には膨大な報告書が残され

ている。翻訳されたルイスフロイスの『日本史』やロドリゲスの『日本教会史』は歴史書としても当時の日本を知るための貴重なものとなっている。

② キリシタン茶道具

桃山時代の手法による十字架文様の入った茶碗が今に残っている。陶磁器は燃えたり腐ったりしないので、多く歴史の証拠となる。キリシタンとなった茶人の発案で注文されたと思われる十字の形をした茶釜、茶器などキリシタンものと思われるこの時代の茶道具も多数見つけられているのである。これは当時キリスト教と茶の湯（茶人）がかかわりを持った動かぬ証拠である。拙庵には真に不思議なことで、東博鑑定済の桃山時代のイエズス会紋章入りの「南蛮中継ぎ茶器」があり、イエズス会が茶の湯を行った証明となっている。

③ 南蛮図屏風

狩野正信筆とされるポルトガル貿易船入港のころの風俗を描いた南蛮図屏風が残っている。その中に十字架の掲げられた建物の階上で異国人の宣教師に若い僧が天目台に乗せた茶を運んでいる場面が描かれている。これは教会の中で茶がなされていた証拠となるものである。

④ キリシタン大名茶人の輩出。高山右近の信仰と茶の湯

利休の弟子には蒲生氏郷を筆頭にキリシタン大名で茶の湯を嗜んだ武将が多く存在したことは史実となっている。ことに右近はキリシタン茶道の代表格として今に語り継がれている。

四、ロドリゲスが見た茶の湯

—— 宣教師は茶の湯をどのように理解したか 「日本教会史」より

ヴァリニャーノや他の宣教師たちの茶の湯への個人的な見解は文献的には見当たらないが、幸いなことにジョアン・ロドリゲスの手になる報告書『日本教会史』の中に二十八章中の四章、七十ページを割いて当時の茶の湯の様子がかなり詳しく書かれている。このロドリゲスによる茶の湯の報告書から、一人の宣教師が日本の茶の湯をどのように見たのがわかり、見聞当時の茶の湯の在り方を知ることができる貴重な資料となっている。

この「日本教会史」は本文内容から一六二〇年ころマカオで書き始められ、一六三四年ころ脱稿したとみられている。ロドリゲスは一六一〇年追放となるまで日本にいたから、「利休の晩年から織部の時代にかけての茶道界を直接見聞して記録を残したことになる。」

日本教会史の中の茶の湯に関する四章の内容は【・32章Ⅱ茶の製法、効能について ・33章Ⅱ茶の湯の歴史と茶の湯の特徴についての説明 ・34章Ⅱ茶事の流れと内容 ・35章Ⅱ茶の湯の目的と効用について、】という構成である。

初めに、ロドリゲスが茶の湯をどのように見たかを見ても三三章の初めの部分から見てもよい。「この饗応と礼法の仕方は普通一般の儀礼とは違っていて、むしろそれとは反対の形式による・・・ものである。それは華美壮麗なところがなく、隠遁的孤独で、世俗的儀礼的交際から遠ざかって茅屋の中に閉じこもり、自然の事象の観察に耽る僻地の隠者を真似た孤独の様式なのである。・・・」従って、この茶を勧め、会話を交わす招待は大いに静寂と謙虚さを保ち、その座で目にする事物を家の主人に向かってほめることをせず、心の中で黙考し、その中に藏された神秘さを自身で悟るためである。」と茶席の様子を描写している。ロドリゲスは驚きと戸惑いの中で日本人の茶の湯につ

いて長い言葉で書いてるように見えるが、読み返してゆくと大事な深い概念がちりばめられ、観察の深さが見えてくる。庵内の様子とそこにいる主客の様子、茶の湯の心構え全体がみえてくるようである。

「このもてなしに用いられる器物や陶器は、金製でも銀製でもなく、贅沢に磨き上げられた貴重な材料を用いたものでもなく、全く光沢も装飾もない粗末な陶土と鉄のものであって、光沢や美しさのためにそれが欲しくなるような欲望をそそるものではない。しかし日本人は：かかる神秘さをまさにそれらの中に見出したのである。」とある。当時「侘茶」という言葉はなかったが、ここで書かれている茶の湯はまさに利休の侘茶であろう。

ここではまず反対の形式というところえ方に注目したい。饗応といえば、家も室内の装飾も器類も壮麗華美に構えるが、田舎の小さな家に招き、見映えもない器でもてなす。茶の湯の招待が世の常とは逆の方向であるとの茶の湯認識が初めに書かれていることは意味深く見える。さらに、茶碗の鑑賞に関して、表面的な美しさを鑑賞するのはなく、地味な茶碗にも、秘められた深い意味を見出している日本人の見方に評価を与えている。これは当時の茶の湯者が、モノの意味、価値、固有性と真剣に向かい合った証言でもある。『神秘を見出す』という表現を日本人は用いないが、自然界や作られたモノの世界との茶人のかかわり方、力量まで観察している。ここにも当時の茶の湯が形式以上の修道的で精神性の高いものであったことが伺える。

ロドリゲスはこの茶の湯についての報告書の最後の章『数寄が目指している目的とそれに伴う効果について』の中に、「かくして数寄 *suji* は三つの主要で不可欠な要素を持っており・・・」とまとめている。第一は「すべてにわたる最上の清潔さ」(清め)。第二は「田舎風の孤独」(世塵を離れ自然の中で静まる。脱離)第三に「調和と一致」の三点である。茶の湯の根本は清めであり、方法は脱世間であり、目的は一座建立という調和と一致である。キリスト信仰においても、霊において、まず清められねばならないし、世から離れ、神との調和、一致に向かうのである。この章で調和、一致という言葉は六ページの中に十四回使われており、ロドリゲスは茶の湯のことを「調和と

一致の学問』『真の学問』とも表現している。日本的に言えば「調和と一致の道」となるが、報告書なのでわかりやすく学問と書いたのであろうが、調和と一致こそまさに茶の湯の目的であるとまとめているのである。ロドリゲスがこのことをキリスト教との対比として書こうとした意図は読み取れないが、三つにまとめた茶の『主要な要素』清め、脱離、調和はキリスト教の大事な要素と重なっていたことになる。

(このロドリゲスの著述は、多くの箇所で限りなく考察を誘うが、禅と茶の湯との関係をかなり詳しく語っている点にも注目したい。珠光は墨蹟を掛け、道、生き方としての茶の湯を提唱し、「うちは律儀に」と心のうちにあるものを問うた。茶の湯自体は喫茶の方法である。内面の価値や到達目標を示すものは禅であった。茶の湯が道となったとき、その横に禅が援けとして必要となったこと、禅と茶が、一組となっていたことが書かれていることも心に留め置くべきことであろう)。

五、四百年を経て、今に続く「キリスト教と茶道」

一六〇三年、ヴァリニャーノは日本を去り、一六一四年、家康の禁教令で高山右近もルソンに流され、織部は同十五年死罪となり、同三九年からポルトガル船の渡航も禁じられ、日本は完全な禁教鎖国の体制に入った。日本からキリスト教もキリスト教とかかわる茶の湯も徳川時代の初めに鎖国とともに世の表からは消えてしまった。

利休の精神性を極めた小間の侘茶は、徳川の時代になると弟子の織部が指導者となり、武家の茶が盛んになって遠州に引き継がれ、千家の茶も町衆にはやり、ともに大勢が稽古できる開放的な雰囲気の間中心の茶へと移行しながら幕末まで茶の湯の隆盛は続いた。

明治維新による廃藩後は、武家の没落により茶道界は存続の危機を迎えた。実業家たちによる数寄者の茶の湯の

隆盛や、婦女子教育に茶道の採用が進言されたことなどにより持ち直した。

秀吉の禁教による宣教師の追放。徳川の禁教と鎖国により、鎖国の間茶の湯とキリスト教は離れたままの時間が続いた。維新から戦後までの間も、茶の湯とキリスト教の関係を知る人はいなかったのであろう。

キリスト教と茶道に結びつきがあったことが知られたのは戦後になってからである。一九六七年に出版された『大航海時代叢書』の中に欧州に保管されていた桃山当時の宣教師の報告書が翻訳されてからのことであった。次第に茶の湯とキリスト教の関連が語られるようになり、教会やキリスト者個人として個別にキリシタン茶会や茶事が開かれて来たのであるが、茶の湯とキリスト教の関係が現在において組織として公式に問われることはこの度までではこれまでなかったのではないか。

現代の茶の湯

ロドリゲスの教会史は結びとして「教寄が修徳と潜心ために大きな助けとなると分かった」という高山右近の言葉を記している。身をもって茶道とキリスト教を生きた右近が流されて現在四百年ほどの歳月が過ぎた。現在の茶の湯とキリスト教のかかわりはどのようであろうか。さまざまな試みがなされているのを見聞きするが、個別であり、多様で自分には論じきれない。ここでは、現代人の茶の湯とキリスト教との出会い方として、自分の小さな体験と英国のご婦人の体験の一文を紹介した後、キリスト教と茶道をさらに見てゆきたい。

創造主から茶をいただく——久々の茶席での出来事

私事であるが、自分が茶の湯を習おうと思ったのは、「本当のいのち」、いわゆる実存を求める中でのことである。日本の美を考えて京都を旅する中で、茶の湯を知らなければ京都も日本美もわからないと思い、二十五歳のとき茶

道を習い始めたのである。やがて河井寛次郎との出会いを通して陶芸の道に入った。陶芸修行の五年間茶の湯はあえて休んでいたが、独立して、師の茶室をたずねたときのことである。茶が出されると習い覚えたとおりに頂戴の挨拶をし、茶碗を押し頂いて感謝を表したとき、天の創造主なる神に感謝している自分に驚いた。私は修行中にキリスト信仰を持ったので、キリスト者として茶を喫するのはこの時が初めてであった。自分が何に向かつて感謝しているのがわかり、震えるような気持ちになったのを思い出す。これが私のキリスト教と茶の湯の出会いであり、創造主を前提とした茶の湯への目覚めでもあった。

これは一個人の出来事であるが、時代や茶席の形式が変わっても、この「創造主から茶を受け、感謝をささげ返す」ということは茶の湯とキリスト教のかかわりの重要な行為であり特性と思われる。この時人は神と結ばれ、自然と結ばれ、人と結ばれるからである。

宇宙を飲む——『礼拝行為』としての茶の湯

信仰を持ちたての自分には信じる神から頂いたということ以上のことを思うことはできなかったが、茶の湯では茶を喫するとき「宇宙を飲む」という言い方がされることがある。茶碗の中の宇宙を茶とともに自らのうちに取り込んで、全存在と一つになるといふ境地といえよう。そこには命をはぐくむ地上の、宇宙のすべての要素が含まれている。茶の木の生育に必要な太陽の光、温度、空気、水、土と栄養素。茶を粉にする道具と技術。茶を扱うための茶杓、攪拌するための細く割かれた茶筌、飲むための茶碗。その他さまざまな材料による諸道具があり、それらを入れる茶室のための材料まで、自然界の全体を恵みとして頂くのである。

このことを現代のイギリス人女性のエスター・デュ・ワールは、一文を認め、茶室での喫茶は「礼拝行為」ともなると述べている。茶を喫するということは境地に応じて限らない奥行きを伴う儀式的行為であることを知る。

「多分これもまた、東洋から学ぶことかもしれません。日本の茶道の作法は、人と物に対する尊敬と敬意の繊細な感情を示しており、それは聖ベネディクトの認識と共通するものを多く持っています。一人一人は丁寧に挨拶され、ひとつひとつのもの（小さい炉、炭火、順序良く並べられた茶の道具、とりわけ特別に選ばれた陶器の茶碗）は、それぞれに固有な素材と形に、またまたそれらがこの機会になす貢献に対して、敬意を表する方法で扱われています。客はめいめい、飲む前に茶碗を両手に取り、回し、差し上げ、この器とこの茶を作ったすべて——土、粘土。陶器師の技術、太陽、火、水、茶の木——に尊敬と感謝の念を表します。最も普通の行為と最も平凡な物質が、この瞬間、一つの礼拝行為となります。」⁹⁾

現代のヨーロッパの女性が茶室で茶の湯を体験したとき、喫茶という普通の行為が「礼拝行為となる」、「日本から学ぶべきことである」と述べ、茶の湯に、祈り、感謝、礼拝の神への道を見出だすという認識を示したのである。このことはふとかの異国の熱誠の巡察師の認識、直観のことを思い返させる。かつて封じられたヴァリニャーノの霊的直観は「神への道としての茶の湯」を見ていたのではないかという想起に至るのである。

六、天地人の調和 ミサと茶の湯

① 回復としてのミサと茶の湯——失われた四つの調和

さて本題、本稿のタイトルの『ミサと茶の湯に見る天地人の調和』に入りたい。

人間は失われた存在であり、四つの調和を失っているといわれる。その四つとは、①自分との調和、②他者との調和、③自然との調和、④神との調和である。この指摘は神父様方の説教のなかに、最近ではフランシスコ教皇様のメッセージにも表れてくる。私はいつのころからか、これらの調和のとれた状態を「天地人の調和」と名付けて

いた。天は神、地は自然界、そして人は人間のことである。ではどこに、どのようにすればその調和は現れるのであろうか。

② 茶室こそ天地人の調和

ある日その空間の落ち着きにふと茶室こそ天地人の調和の場であると思つたのだ。ロドリゲスが茶の湯を『調和の学問』と評したが、茶室は地上では類を見ない調和と一致をあらわした天地人の調和の世界であろう。戦国時代の武將ばかりではなく、現代においても、茶室にはそこに入れば皆が安らぐ世界に類のない特別な場所であろう。

日常を離れ、時計も貴金属も外し、かつては刀をも外し、蹲で手口とともに心中をも清めて席に入る。茶室では素材が適材適所に最大限に生かされ、諸道具は互いに引き立て合うように配置され用いられる。客亭主は己を低くして礼を交わす。野の花一輪の飾り。心込めて茶が点てられる。人、物は丁寧に遇され、皆等しく茶をいただく平和と喜びの一座建立である。神、自然、人が一つに結ばれた類のない天地人の調和の場といえよう。そこは神の恵みへ感謝であり、捧げ返される神殿となり、神と人と自然が出会う聖所といふべきものといえよう。

③ ミサは主のもてなし・調和と一致の究極

茶室こそ天地人の調和だと思つていたが、カトリック信者となりミサに出る中で、落ち着いた、聖体拝領に向けての静かな整然とした美しい流れ、様子に、ミサに天地人の調和を思つた。信仰心とそれをあらわす所作、心と形の一致を求めて丁寧に編まれたミサのプログラムは、頂点である聖体拝領に向けて心合わせて進められる。このため真剣さに驚いた。これぞ「一座建立」である。ミサに出席する中で、私には茶の湯が何をしようとしているのかがわかつたように思えた。

主の食卓に招かれ、もてなしを受ける。キリストの御体をいただき、キリストとひとつになる儀式であるミサは究極の神との一致である。ミサにおける聖体拝領こそは失われた調和の真の回復である。ラウダート・シ 236には、最高度の表現をもってミサを語り、ミサにおける聖体拝領において、天地人、すなわち神と被造界（自然界）と人間の調和と一致に至るありさまが述べられている。『創造されたすべてのものが最も高められるのは、聖体においてです。・聖体は、天と地を結び被造界全体を抱き、そして貫きます。聖体であるパンにおいて、被造界は神化へと、聖なる婚宴と、創造主ご自身との一致へと向かうように作られています。』

④ ミサ式次第と茶事の流れ

このミサと茶事の流れは不思議なほど似ているのである。ここにミサと茶事の形式面の類似を対比してみたい

「茶事」とは茶の湯における正式な招待のことで、客一同が一碗の濃茶を共にするための一会である。茶の湯の稽古というのはこの茶事における亭主振り、客振りができるようにするためのものである。ロドリゲスが「数寄の家における茶に特別に招待する方法」という題で一章を取って長い説明をしているのはこの茶事のことである（『日本教会史』三四章）。正午の茶事を基本として、朝や夜にも行う。茶の湯の正式な招待は「粗茶一服差し上げたく……」という簡潔かつ心込めた招待状から始まる。粗茶とあるがそれは濃茶のもてなしであり、薄茶はそのあと添えとして出される。食事時にかかるとお凌ぎとして、懐石といわれる簡素を旨とした季節の膳も供される。およそ二とき（四時間）ほどをかけて行われる。

茶事の流れを簡単に記す。まず亭主より招きをいただき、決めた時間に遅れず参上する。寄りつきにて白足袋に履き替え、身支度をする。つくばいで清めをして席入りする。その日のテーマの床の間の掛け軸を一同拝見すると客亭主の初座のあいさつが交わされ、炉の炭が直され、季節の簡素な膳が運び出される。

湯の沸く間に食事をとり、中立ちの後、席が改められ濃茶が供されるという流れである。ミサと茶席を比較してみよう。冒頭に「ミサも茶事も共に」と入れて読んでみて頂きたい。

① この一会は招きにはじまり、招きへの応答である。

② 水で身を清めて席入りする。

③ 初めに主、客が顔を合わせ挨拶が交わされる。

④ 式の流れには約束があり、⑤それに従って亭主（司祭）、客（信徒）が応答し合いつつ進められが、季節、会によって変化もある。

⑤ 席は前半と後半に分かれており、前半は言葉を中心に置く（御言葉・掛け軸）

⑥ 後半はミサでは聖体は拝領、茶席では濃茶の回し飲みがなされるための時間であり、その会の頂点である。

⑦ 何も無いところに必要なものが運び出される。

⑧ 亭主は必ず手を清め、⑨亭主は皆の前で、器を清め、決められた手順で供するための準備をするのである。

⑩ 皆に行き渡れば、器を片付け、元の場所（香部屋・水屋）に運び戻す。

⑪ 自然界の象徴として花が飾られる。

⑫ 誰もが快いと思えるように、見えない価値を見えるものに、形象の中に心を示してゆく世界である。

⑬ 日常を離れ、⑭自分を取り戻し、⑮一座建立すなわち共同体を回復させ、⑯天地人の調和、存在の在り方の本然の回復を果たさんとするのである。他に類のないこの二つの世界は流れにおいても実に類似していることがわかる。

⑤ キリスト教と茶道 もう一つの共通点

——降りてゆく生き方

茶の湯とキリスト教は、「侘び」に注目すべき共通点がある。それは「降りてゆく生き方」ということである。村田珠光は、東山流の御殿の茶の湯を草葺きの民家に移し、茶碗を雑器に、象牙であった茶杓を竹で作り始めた。弟子に宛てた手紙（心の一紙）には「我慢」、自分を偉いと思うことをたしなめ、心を低くする茶の湯を教えた。茶の湯の舞台と道具、素材とともにこころの持ち方も変えて、降りてゆくことを始めたのである。紹鷗の侘びへの理解は先に引いた『侘びの文』（註2参照）を読んでも、降りてゆく生き方において一層深い境地はいつているのを見る。『侘びの文』から見ておきたい。

『侘びと云ふこと葉は、故人もいろいろに歌にも詠じけれども、ちかくは正直に慎み深く、おごらぬさまを侘びと云ふ・・・。』

侘びという言葉を定義するのは難儀であるが、自分はこのように思う、と簡潔に記している。『正直に慎み深く、おごらぬ様を侘びと言う』。紹鷗という茶人の姿が見えるほどの、胸の奥に響く一文であると思う。そして数行置いて次のようなことが書かれている。

『天下の侘の根元は、天照御神にて、金銀珠玉ちりばめ殿作り候へばとて、誰あつてかしかるもの無候に、かやぶき、黒米の供物、何から何までもつつしみ深く、おこたり給はぬ御事、世に優れたる茶人にて御入候。』

「主神」とされる天照大神が万事つつましくしている様を、侘びといい、優れた茶人として見出した視点があつたことに驚く。果たして紹鷗がキリストを知っていたかわからないが、紹鷗の茶の湯への深い見識に触れる思いが

する。

極侘びは極真に帰る

紹鷗の後を継いだ利休は山里の草庵を理想とした。自分を低くし、素材を素なるものに、茶の湯の場を山に帰してゆく生き方、美学。小間の台目畳で、焼締めの水差し、黒檜の茶碗、竹の花入れ。足なしの膳による淡膳。利休によって侘びは極まった。「極侘び」である。誰の言葉であろう、茶の世界には「極侘びは極真に帰る」という言葉が残る。名物ひとつない一番低くなった茶の湯の姿を東山流の茶に劣らぬものとなるというところえ方は大変興味深いことである。

侘びの極致はキリスト

この特異な美学は聖書の中のキリストについての記述を思い出させる。

「キリストは神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができなとは考えないで、ご自分を無にして、仕えるものの姿をとり、人間と同じようになられたのです。キリストは人としての性質をもって現れ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。それゆえ神は、キリストを高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。」ピリピ二・六―八

神であるキリストが、地上に下り、ナザレに育ち、十字架の死にも従い、黄泉にまで下り、これ以下の死はないというところまで下られた。極侘びも極致であろう。

聖書には「神は高ぶるものを退け、へりくだるものに恵みをお与えになる」「主の前にへりくだりなさい。そうすれば主があなた方を高くしてください。」(ヤコブ四・7)。このへりくだりの原則は聖書の中で多く説か

れるが、侘茶もまた心を低くするところに人間の真実、真のいのちの道を見て、珠光、紹鷗、利休と進んだところでキリスト教と出会うのである。己を低くし、自然と向き合い、人との平和に降りてゆく親和の道において、また降りてゆくことによつて高められるパラドックスにおいてキリスト教と侘茶は同じ性質、方向性を持つものといえよう。

七、修道としての茶の湯

茶の湯はもてなしであるが、在家の修道でもあり、「和敬清寂」、時間を取り戻し、自分を取り戻し、他者を取り戻し、自然と天主を取り戻すための行でもある。『ベネディクトの戒律』と茶の湯には共通するものを見出すので記してみる。

ヤコブの夢の梯子

謙遜によつて高められることについては、「聖ベネディクトの戒律」¹⁰の中に有名な梯子のたとえがある。「そこで、修友たちよ、・・・謙虚な生活を通して、天の頂に素早く到達することを望むならば、・・・ヤコブが夢のうちで天使が上り下りするのを見たあの梯子を立てなければなりません。この上り下りとは、間違ひなく、高慢によつて下がり、謙遜によつて上ることと理解されます。」（七章五節）

ベネディクトの修道院は観想修道会であり、終生そこから出ない。この定住、完全な無所有と謙遜と従順の不由と見える極侘びを通しての、神と自然、他者への回帰の生活である。茶の湯者の生活は基本的に市中の山居という街中での侘び理念の実践であるから、脱離においては禁域の修道に及ぶものではない。ベネディクトの修道院生

活はまさに脱離の手本であるが、脱世間による修道ということでは共通点を見出すのである。まず侘茶もベネディクトも降りゆく生き方である。脱世間において見えないものを求めてゆく修道の目的に到達するために方法を講じる必要が生じる。茶の湯では茶を点てるための手順から始まる。修道士には神の業のための手順書というべき戒律が編まれる。修道院も茶室も「あるべきものが、あるべきところにあるべきようにある」ことを目指しており、そこに秩序と調和が生じる。点前の作法はまさに戒律と同じことであろう。決められた通り行い続ける中で、人は内発の善、自由へと導かれることを説く。

こうして考えてみると「あるべきものがあるべきところにあるべきようにある」、という調和の姿は、主の祈りに通じるものであり、この天地人の調和の空間は、ミサと修道院と茶室に共通するものとして見出されるといふ理解に至るのである。

ミサは主の招きであり、御聖体によるもてなしを通しての一致の回復である。一方修道院は神との一致を深める修行の場であり、世に修道の規範を示すものでもある。もてなしと修道が深く関わり合うことについてはベネディクトも、ヴァリニャーノによる茶の湯採用のときも、ヨハネ・パウロ二世によっても言われていることである。

茶の湯はそれだけでは茶を点てる技術と喫茶の行為に終わってしまうが、禅と出会って道となったように、キリスト教との関わりでいえば、茶の湯はミサ的要素と修道的要素を持っているので、ミサと修道院に触発されつつ、現代にあっても教会や信仰生活に仕える在り方に開かれているものと思われる。

八、ラウダート・シとしての茶の湯

ラウダート・シとは

『ラウダート・シ』、この聞きなれない不思議な響きの言葉は、二〇一五年に出されたフランシスコ教皇の回勅のタイトルで、自然を愛したことで知られるアッシジの聖フランシスコの詩「太陽の賛歌」の一節『ラウダート・シ・ミ・シニョーレ』によつてゐる。イタリア語の古語で〈たたえられよ わが主〉の意である。

「たたえられよ わが主、あなたから作られたもの、わけても 貴き兄弟 太陽によつて。 彼は昼を造り、主は彼により われらを照らす・・・」続けて、月、星、大気、雲、水、火の働きをほめつつ、神をたたえている。

賛歌とは賛美の歌のこと。歌や言葉で神をたたえる「賛美」もキリスト教の大きな特徴の一つである。

フランシスコ教皇のこの回勅は、〈共に暮らす家を大切に〉という副題がつけられているところからもわかるように、自分たちが生きている地球が荒らされ、叫びをあげている状況に対して総合的なエコロジーを語る書である。地球破壊とその被害者の回復への願いと祈りの書であり、地球、人間、自然の価値と意味が語られている。

喜ばしき神秘

地球は今危機の渦中にあるが、教皇様ははじまりにこう記す。

「世界は、解決すべき問題であるよりは、むしろ歡喜と賛美をもつて觀想されるべき喜ばしい神秘なのです。」(ラウダート・シ¹²)。この世界、自然界は単なる合理的な物質現象に終わるものではなく、「喜ばしい神秘である」と宣言される。まずこの世界がどれほど魅力的なものかを知らなければならぬ。喜ばしい神秘ということは、触れるほどに得られる喜びは汲みつくせず、その泉は神の奥儀に及ぶということであろう。「神の自然¹³」は私たちの目の前にあり、神秘にまで開かれている。しかし人は自然に目を向けず、目先の効率と収益のために都市集中と都市化への開発は終わることがない。この「経済学の時代¹⁴」は自然へのまなざしをも忘れてしまったかのごとくである。

恵みの秘跡としての茶室

昔から茶室はこの世の外であったが、現代ではまた特別な空間であろう。丁寧さは茶室の大きな特徴の一つである。人、もの、自然が丁寧に扱われている。客亭主、客同士丁寧にあいさつを交わし、思いやりを旨として、無視されるものがない。器も諸道具も丁寧に大切に取り扱い扱われている。

茶室とそこにあるものの材料はすべてが自然界の素材によっている。現代ではそれは茶室だけかもしれない。素材はすべてが神秘である。数寄屋も工芸品もこの神秘の丁寧な解きほぐしの実である。拝見し、素材の魅力、作り手やこれを用いた亭主の心に触れ、これらのすべてを与えた天主をあがめる。一つの器を介して、客、亭主、自然界、天主はここに一つとなる。茶室は天地人の調和、「ラウダート・シ」の聖堂となるのである。

日本的なラウダート・シ

書きつくせないが茶室がラウダート・シしであることが理解いただけたかと思う。日本のこころによる賛美を二つ紹介したい。

後座の花 中立ちの後、喚鐘を聞いて再び席に入る。初座の掛軸は外され、床の間には露を含む野の花が一枝。花伝書には、思いがけず花に出会う驚きを「折々に咲き出る珍しさ」とあるが、思わず息を吞むときである。この後座の花を「日本美学の極致」と言った人がいた。

もともとは最上の美術品を飾るべき床の間に、すべてに変えて野の花一つを生けてもてなしとするのである。時^と節^きを示し、自然美の徴とする。花の咲く星が他にあるうか。この花は亭主のもてなしだが、花に天主の永遠の力、自然界への慈しみと人間へのもてなしを見ることとなる。

十月こそ侘びなれ 初めに引用した「侘びの文」の中に紹鷗は定家の歌を引用している。

いつわりのなき世なりけり神無月 誰がまことより時雨そめけん

時雨という侘びた風景を前にして、定家はその風情の奥に入り、神の月に掛けて思念を歌に詠んだ。へいつわりの多い世と考えていたがそうではなかった。十月になると必ず時雨が降り始める。これはいったい誰の誠の心によるものだろうか」と。

「誰がまことより、とは心言葉も及ばざるところを、さすがに定家卿に御入り候。」侘び風情の中に、忘れることなく季節をめぐらす天の誠心を思い称える。まことに日本の風土、伝統により詠じられた「ラウダート・シ」といえよう。

自然界は神の贈り物

東方教会のアレクサンドル・シュメーマンは自然界の受け方、天地人の間での人間の在り方について、次のように語る。

「聖書では、人の食物、すなわち人が生きるために関与しなければならないこの世は、神から『神との交わり』として与えられたものです。人の食物としてのこの世は物質的な何かではなく、物質的な機能以上のものがあり、∴、存在するものはすべて神の人への贈り物です。人が神を知り得るため、また人のいのちを神との交わりにするための贈り物です。人に食物を与えいのちを与えたのは神の愛です。神はそのお造りになったものを何もかも祝福します。神はすべてを『しるし』として、ご自身の存在と知恵、愛と啓示の手段として

お造りになりました。：全被造物は食物に依存しています。しかし、人のみが神から受け取った食物といのちを讀えるべく存在している点に、全被造世界での人の独自の位置があります。

人はまず「司祭」として定義されます。彼はこの世の中心に立ち、神を賛美し、神からこの世を受け取り、そして受け取ったこの世を神に献げる（ささげ返す）という両方向の行為を通じてこの世を一つにします。人はこの宇宙的な機密（サクラメント）の司祭なのです。」（アレクサンドル・シュメーマン『世のいのちのために』）

この自然、世界を神からの贈り物として受けるとき、物質主義とは違うもう一つの世界との関わり方が私たちの前には開かれているのである。「ラウダート・シ・ミ・シ・ミョーレ」、〈称えられよ、わが主〉と天と地の間に立ち、頂いたものを捧げ返すとき、天地人の調和の命に与る。神のもてなしであるこの世界はラウダート・シの大聖堂となるのである。

(了)

註

(1) アルメイダの送別にと茶会が開かれたときの記事。フロイス日本史59章)

(2) 『紹鷗侘びの文』

『侘びと云ふこと葉は、故人もいろいろに歌にも詠じけれども、ちかくは正直に慎み深く、おごらぬさまを侘びと云ふ。一年のうちにも十月こそ侘びなれ。定家卿の歌にも、

いつはりのなき世なりけり神無月誰がまことより時雨そめけん

- とよみとりけるも定家卿なればなり。誰がまことより、とは心言葉も及ばざるところ（不及処）を、さすがに定家卿に御入り候。ものごとの上にもれぬところなり。
- 天下侘の根元は、天照御神にて、日国の大主にて、金銀珠玉をちりばめ殿作り候へばとて、誰あつてしかるもの無候に、かやぶき、黒米の御供、其外、何から何までも、つつしみおこたり給はぬ御事、世に勝れたる茶人にて御入候。』
- (3) 「侘茶」という言葉は利休以前の文献にはなく、江戸時代になって用いられた言葉であるが、珠光、紹鷗、利休の茶とその流れを現代では侘茶と称して語られている。
- (4) 「其比、茶湯セザルモノ、人非人ト等シ」山上宗二記
- (5) ヨハネ・パウロ二世『聖人たちの養い手・聖ベネディクト』18ページ
- (6) スムットニー・祐美著『茶の湯とイエズス会宣教師』掲載イエズス会文書資料。「日本管区規則」の中の「茶の湯者規則」
- (7) ロドリゲスは一五六一（一五六二）〜一六三三（一六三四）ポルトガルのベイラ地方セルナンセーリエの生まれ。
- 一五七七年十六歳で来日。十九歳でイエズス会入会。鹿児島で八年間学び、一五九〇年二十九歳ころからフロイスに代わって、ヴァリニャーノの通訳を務めている。
- 日本語と日本の諸事情に詳しく、大事な通訳を務めたのでツズ・ロドリゲスといわれた。
- (8) 『日本教会史 上』補注十二p六六八中村昌生注釈
- (9) (エステル・デュ・ワール『神を探し求める』一九八四年・七章)
- (10) 聖ベネディクトは五世紀イタリアのヌルシアに生まれた。（四一〇〜四八〇）

ローマ滅亡によりすさんでいたヨーロッパを、ベネディクトの修道士たちは指導して、地元、国、ヨーロッパと立て直したので、ヨーロッパの守護聖人とされている。先達に学び、独自に編纂されたその戒律はすべての修道院のもととなり、修道院の父ともいわれている。その教えを記す戒律は千五百年を経た今も人々に命の道を示している。

(11) ケネス・ラックス著『アダム・スミスの失敗』草思社

(12) 田中裕著『自然ということ』。「無因自然」論に対して、神による創造を前提とした自然観。